

〔平成26年度明専スクール〕

明専スクールにかける「思い」

制60 松岡 英樹



1、活動のきっかけ

平成22年（2010年）12月のある日、上司から呼ばれ、「採用活動強化の一環としてOBによる学校訪問を始めるのでリーダーをやってくれないか?」「仕事で母校に行けるなら喜んで!」そんなやりとりから、卒業以来四半世紀ぶりに母校と私との関わりが再開しました。活動2年目の平成24年2月、私と同行していた中條康治（設制H7 本田技術研究所）の同級生で第1回明専スクールのグループ討議のサポートをされていた川村義憲さん（設制H7 安川電機）と小倉で一緒に飲むことになり、その際、明専塾／明専スクールへの参画を打診されたことがこの

活動の始まりでした。幸い弊社の採用部門からも理解が得られ、平成24年度から私は明専スクールの講義を、内堀憲治（電61）はグループ討議を、また椎木克昭（金61）雲丹亀真剛（設生H11）坂根健太（情創H19）の3名は明専塾担当という分担でホンダの明専会活動がスタートしました。明専スクールを起点として私には、

中尾先生からPBL審査員のご依頼があり、さらに永松先生からはキャリア形成入門の非常勤講師のご依頼もあり、学校とのつながりは年々強くなっています。そして平成26年度、私は内堀からグループ討議の担当を引継ぎ、新たな気づきや発見とともに、OB共通の「思い」をさらに一歩、行動に移せる機会を得ることになります。

2、明専スクールの価値

学生の立場から見た明専スクールのメリットは、学校に居ながら現役技術者や役員クラスの諸先輩方から、建学の歴史に始まり実体験やノウハ

ウなど、社会人になるにあたっての貴重な情報が得られることです。平成24、25年度と私は前半の講義を担当しましたが、やはりなんといいてもその真骨頂は、今回初参加した1泊2日のグループ討議の合宿です。

濃密な2日間の中で、企業人の考え方やプロセス、報告書の書き方やプレゼンのノウハウ、思考テクニクなどを伝授され、学生たちは日頃向き合う工学とは全く異質で、明確な答えの無い難題に向かい考え苦しみ、己の力の限界を知ります。しかし最終的には全員の個性を相乗的に大きな力に変え、一人では決してできない優れた結果を導けることに気がつきます。様々な会社で活躍する先輩と接しながら、「座学↓討議↓懇親会↓2次会↓入浴↓寝る」まで、文字通り寝食を共にしながら、とことん時間を共有し、あらゆる場面で学生との会話が弾みます。これこそが明専スクールのグループ討議の価値であり、学生の満足につながっていると思われれます。当然このような機会は大学の正規カリキュラムには無く、九州工大独自の貴重な教育イベントとして続けていくために、明専会や我々OB・OGの役割は重要です。

3、OBの思い



全体発表でのアドバイス

私が母校に戻ってくる目的は2つあります。1つは会社として、明専会のイベントを採用活動の延長線上にあるものと位置づけ、積極的に利用することです。もう1つは自分が、普段の職場から離れて今時の学生と接し、彼らの考え方から大いに刺激を受け、また彼らの成長を自らの喜びとすることです。貴重なリフレッシュの機会としてのことです。特に後者は私が明専スクールに参画するモチベーションの源となっています。植木幹さん（電H1TOTO）をリーダーとする運営メンバーは、後輩たちのことを思い、少しでもこの研修を良い物にしようと、スクール開催の遙か前から定期的に運営会

議を開いています。遠く栃木にいる私は出席できないので、申し訳ない気持ちと感謝でいっぱいですが、議事録やスタッフ間のメールを見てみると、彼らの意気込みが私にもピンピン伝わってきます。そして当日いざ参画してみると、運営側も常に上を目指して向上心を持ちつつ楽しみながらやっている雰囲気がとても心地良いことに気づきます。その結果、学生だけでなく私たちスタッフにも毎回気づきがあり、テーマ設定、講義内容や運営の改良作業に終わりはありません。後輩たちへの「思い」がOBや先生、スタッフを動かしています。スクールは毎回PDCAを実践しており、プログラムは年々進化しています。これは必ずや学生にも響いていることと思います。

4、討議スタッフの思い

明専スクールのグループ討議では、明確な答えの存在しない難しいテーマが出題されます。我々スタッフは、少しでも良い結論に導くために自分のノウハウを可能な限り伝えたいと思っっているのですが、正しく伝わっているだろうか？ こうした方が分かりやすいのではないか？ などと常に自問自答しながら学生と向き



A班討議

合っています。しかしできるだけ自力でやらせるために、明確な指示はしません。ボールを受け取ったら自分で走れるようなパスを軽く出すことが仕事なのですが、ときには思い切り鵜呑みにされ暴走することもあり、全く反応してくれないこともあり、方向と力の加減が実に難しいのです。結果、スタッフは常に葛藤していますが、学生たちには、スクールが終わったときに達成感を味わってほしい！ という思いが根底にあります。常に最善のパスを模索しているのです。

5、学生の皆さんへの思い

これから社会に羽ばたく皆さんに

伝えたいこと

- 実社会は戦場である。企業間、企業内ともヒト、モノ、カネの奪い合いで綺麗事ばかりではない世界。理詰めでは納得できない理不尽なことが多いが、何が正しいか？ 正しくないか？ は絶対に見失うな。
- ときどき現れるチャンスを確実にものにして、ステップアップしていきこう。力を入れるところと抜くところをうまく使い分けよう。
- 企業に入って必ず必要なのは、技術と自分の味方となってくれる仲間である。

- コミュニケーション力はとても大切。成果を上司に伝えるのも、信頼を勝ち取って味方を作るのも、すべてコミュニケーションがベースに必要。
- 将来製造業に関わる人間として、どうすべきか悩んだときは、自分が作ったものを下流で受け取る人（お客様）に聞け！
- 卒業後は企業で結果を出して、いつか明専スクールの講師として戻ってきて欲しい

6、明専スクールの今後に向けて

これまでの採用活動や明専スクール、講義等でも感じていることがあります。それは、明専スクール

のような機会をもっと早い時期に、もっと多くの学生に提供したいということ。それはより早い気づきが学生生活のモチベーションになると考えられるから。大学4年間と大学院2年間はあつという間ですが、入学して間もない1年生は、明確な目標がないためモチベーションが持てておらず、せっかくのキャンパスライフを学びの場として捉えていなかったり十分活用できないまま、何となく2年生、3年生、そして就職活動を意識した瞬間ハツとしてやつとエンジンがかかる。そんな彼らにより早いタイミングで気づきの場を提供したり、1年生であってもすでに上を見ているような明確な意志を持つ人を思い切り引っ張り上げるようなカリキュラムの明専スクールも面白そうです。

明専スクールを、企業において即戦力となり得る人材を輩出する、九州工大と明専会が誇るべき「伝統」と言えるまで継続的に発展させていくために、私はこれからも明専会や大学との「絆」を大切にし、大学と実社会との架け橋として活動を続け、次世代に引き継いでいきます。

(株)本田技術研究所

四輪R&Dセンター